

クズ会 プレ公演 『葉桜になるころ』

2019年10月11日(金)～13日(日)

会場：高円寺 Bar CARAMELOーカラメロー

【登場人物】

男1 客(ツルオカ)・・・鶴谷皇輔(劇団 Alternative/クス会)

男2 バートン(マスター)・・・藤井のりひら(GEKIGAPROJECT/クス会)

男3 たまにくる客(タツノリ)・・・辰巳晴彦(空想嬉劇団イナヅマコネコ)

○バー・カラメロ

小さいながらも雰囲気の良いバー

間接照明の灯りがゆっくりと店内を照らす

バーテンダーの男が酒を出す

男1 「え、今はとってないの？映画」

男2 「うん、学生のころだったから」

男1 「もつたいないねーやればいいのに」

男2 「やめるって決めたから。これも楽しいし」

男1 「おかげで美味しいお酒が飲めてますよ」

男2 「だからちゃんと続けてんの立派だと思うよ」

男1 「立派ってのは違うでしょ」

男2 「まあ確かに、付き合っちゃいけない3Bだから、俺ら」

男1 「え、なにそれ」

男2 「ダメ男の職業トップ3なんだよ、3B」

男1 「知らない」

男2 「美容師、バーテンダー、バンドマン。3B。」

男1 「いや俺バンドマンじゃないからね、ギター引いてるだけ」

男2 「あれこの間ライブやってたじゃん。」

男1 「いやあれは臨時で入っただけで、メンバーじゃ無いから」

男2 「あー、そうなんだ」

男1 「・・・まあ、メンバーとしても誘われたんだけどね」

男2 「そのバンド？」

男1 「うん、海外でデビューするからってさ。ギターやってくれて」

男2 「すごいじゃん、受けなかったの？」

男1 「うん、断った」

男2 「もつたいない、なんでよ」

男1 「かってもらってありがたいけど、俺にまだそんな実力ないしき、メンバーの若かったし、それに・・・この街からあんまり出たくなくて」

男2 「約束したから？」

男1 「そう約束したんだよね、昔ある人と」

男1「この店でできる前なんだけども、このへんに大きな桜の木があったんだよ」

男2「うん」

男1「子供の頃の待ち合わせは全部その桜の木の下だった。ほら、駅なんかまだ使わなかったからさ」

男1酒を飲む

男1「そのうちね、その桜の下で待ち合わせると願いが叶うって言われるようになったの」

男2「願いが？」

男1「うん、まあ多分告ったりする奴らがいたから、そこから派生しただけなんだろうけど・・・それで高校の頃ある人と約束したんだ。卒業したらまたこの街で、二人でこの桜の木の下で会おうって」

男2「うん」

男1「だからその人と再会するまではさあ、なんかこの街から出たくないって言うか・・・ずっと待ってるんだよ。正直向こうは忘れてるかもしれないけどなんか、どこか期待しちゃう自分がいてさ。なんかもう、半分意地だよね。会うまで前に進めないような気がして」

男2「桜の木なんてもう見当たらないけど」

男1「そうそういつの間にかなくなってる、でもちょうどあの辺にあったんだよ」

男2「もう面影もないね」

男1「正直、どこで待ったらいいかわかんないんだけどさ。だから一番桜の木から近い、この店で待ってることにしたの」

男2「・・・ちなみにさ」

男1「うん」

男2「その話前も聞いたよ」

男1「あれ、話したっけ」

男2「80回くらいは」

男1「うそでしょそんなに話してないよ」

男2「じゃ50」

男1「それも多くない？」

男2「んんん60？」

男1 「なんで増えんの？」

男2 「約束を律儀に守ってるのはよくわかったよ」

男1 「ごめんごめん」

男2 「わりと子供っぽいところあるよね」

男1 「そうかな？」

男2 「だって、実際そのバンドについてった方が良かったんじゃないの？なれてない営業とかしなくてよかったし」

男1 「まあ、ね」

男2 「だってバンドマンでバイトって一人で2Bでしょ」

男1 「まって、バイトもダメなの？」

男2 「ダメだよB入ってるもん」

男1 「B全部だめなの？バイトって正確にはAだし・・・え、それだどだってさあ・パン屋さんとかもダメじゃん、ベーカリーじゃん」

男2 「ベーカリーって職業名なの？場所というか、施設名みたいなどころじゃないくて？」

男1 「わかんないけど、パン屋さんだったら付き合いたいけどね俺だったら」

男2 「でも朝早いよ」

男1 「バーテンダーとは対極にいるかもね」

男2 「あとなになかな、バレーボール選手とか？」

男1 「いやそれ田じゃねえし」

男3 入ってくる

男2 「いらっしやいませ」

男3 「あの・・・(男1を見て)ツルちゃん？」

男1 「え？」

男3 「俺だよ！北高の、ほら」

男1 「・・・タツツン？」

男3 「せいかーい！」

男1 「おおお、ひっさしぶり、え、10年？ぶり？ぐらい」

男3 「え、そんな経っつけ？そんな経っつけ？あ、10年ぶりぐらいだわ」

男1 「でしょ」

男2 「お知り合い？」
男1 「高校の同級生の、タツノリです」
男2 「へー、うち初めてだよね」
男3 「初めて入りました」
男1 「いやほんと偶然」
男3 「本当だよ、ていうか生きてたの」
男1 「こっちのセリフだよ」
男2 「何か飲みます」
男3 「ああ、どうしようかな・・・おすすめありますか？」
男2 「んー、そうだな○○とか」
男3 「へえー！そしたらジントニックを1つ」
男2 「ん？ああ、はい」

男3に酒を出す間世間話に花を咲かせる。

乾杯をする二人

○タイトル「葉桜になるころ」

男3 「それはそうとさあ、ツルオカくん」
男1 「いや何急にかしこまってさあ〜昔みたいがいいじゃんツルちゃんです」
男3 「じゃあツルちゃんさあ」
男1 「いやなんか照れくさいな」
男3 「ちよいちよい先に言ったのそっちじゃんかー！」
男1 「いやそうだけどなんかさ、もういい大人じゃん俺ら」
男3 「確かになあ」
男1 「で、どうしたのタツツン」
男3 「ほらそうやって言うー！」
男1 「ごめんごめんごめん」
男3 「はあー！いつもそうだったよなー、ツルちゃんは」
男1 「ごめんて、それで何？」
男3 「お金かして」
男1 「ああうん、うん？」
男3 「お金かして」

男1 「うん？」

男3 「えっと、あなたの、持っているお金を私にかけて」

男1 「いやあの意味はわかってるよ意味は」

男3 「ありがとう！」

男1 「まてまて」

男3 「ん？」

男1 「ありがとうじゃなくて、貸すって言ってないよね」

男3 「今だって・・・おっけーって言わなかった？」

男1 「言っていないよ100幻聴だよ」

男2 「彼は何、借金でもしてるの」

男1 「いや知らないよ」

男2 「二人の関係は知らないけどさ、しばらくぶりの再開なんですよ？」

男3 「そっすね、10年ぶりぐらいで」

男2 「それがひと二言目にお金貸してー、はちよっと急でしょ」

男3 「・・・すいません。そう、ですよ。ごめん」

男1 「ああ、いいよ」

男2 「金の切れ目が縁の切れ目って言うぐらいだし、そう言うのってやっぱほら、関係性がね」

男3 「マスター・・・お金かしてくれませんか」

男2 「今日初対面だよな？」

男1 「どうしたんだよ、借金でもしてるの」

男3 「いやそうじゃないけど」

男1 「・・・とりあえず、落ち着きなよ」

男3 「落ち着きました」

男1 「久しぶりとはいえ、まあ昔のよしみだから。何か困ってるなら力になるよ」

男3 「さっき話したかもしれないけど、俺今海外インターンしてるの」

男1 「うん」

男2 「へえーすごい」

男3 「もうすぐ帰国んだけど、もう少し準備したら起業しようと思って、でも企業って言うてもまず資金があるんだよ。自分である程度貯めてはいたんだけどやっぱ限界があって」

男1 「ああ、なんだそれでお金が必要なのね」

男2 「立派な理由じゃん」

男3 「いや、それでとりあえず出資してくれる投資家は見つかってね。初期投資として二千万ほど出してくれたんだけど。まあ若干心もとなくてね、足りるんだけど、足りるんだけど若干心もとなくてね、それを倍にしようと思ってね」

男1 「うん？」

男3 「走り出しは良かったんだけどねー、コーナーがね・・・ってことで金が入用なんです」

男2 「要するに競馬でスったってこと？」

男3 「競艇です！」

男2 「そっちな、ごめん」

男3 「いやいいんですよ」

男3 「・・・ということですかあ、ツルオカくん」

男1 「いや何急にかしこまってさあ〜昔みたいにいじゃんツルちゃんです違うねこれさっきもやったね」

男3 「お金貸してください」

男1 「無理です」

男3 「そこをなんとかかんとか」

男1 「なんとかはならないしかんとかって何」

男2 「2千万なんて大金ないない」

男3 「じゃあ逆にいくらまでなら貸せるの」

男1 「・・・そう、言われて、なぜ、ここで金額言うと思った？」

男3 「頼むよ俺このままじゃ相模湾にチンされる・・・」

男2 「相模湾ならギリギリ大丈夫だって」

男3 「いや大丈夫要素が見当たらないですよお」

男1 「力になれるならなりたいのは本当だけど、お金なら借りる先間違えてるよ」

男2 「そうだよ、彼2Bだよ」

男3 「2B？」

男2 「バンドマンとバイト」

男1 「いやバンドじゃないって」

男3 「へえー、ツルちゃんまだバンドやってんの！」

男1 「バンドは組んでない、まあでもギターはなんとかやってる」

男3 「覚えてるよ！後夜祭でギター弾いてたよな！あれカッコよかったあ〜！そっかすげえ。夢叶えたんだ」

男1 「メジャーデビューもしてないし、見ての通りそれだけで食べてないから」

男3 「いやそれでもすげえよ。なんか嬉しい」

男1 「え？」

男3 「いや高校の時のお前のギターカッコよかったからさあ〜、ちゃんと続けてんだってなって」

男1 「・・・ありがとう」

男3 「ほら、岸川がうたって。そうあいつ今何してんの？」

男1 「岸川？」

男3 「そうそう、仲よかったろ？」

男1 「まあ、あの頃はね」

男3 「もう会ってないの？」

男1 「うん、卒業してからは」

男3 「岸川は歌手目指してたんだろ？てっきり連絡とってるものかと」

男1 「わかんない、成人式も同窓会も来なかったし、誰もわかんないみたい。ていうかそう！それで思い出したんだけど」

男3 「え、何」

男1 「俺同窓会の時とか連絡したんだよ？成人式も。そしたらアドレス変わったってなって」

男3 「ああー、ごめんケータイ変える時連絡帳全部消しちゃって」

男1 「全部？」

男3 「いやなんかめんどくさくなっちゃってさー、アドレスも変わるしいいかって」

男2 「なんか、アドレス変わりましたメール送るの面倒だよな。返ってこないと悲しい気持ちになるし」

男3 「そうでしょそうでしょ」

男2 「消しはしなかったけどね？あ、でもアドレス変えちゃったから、こっちは遅れるけど相手からはとどかない状態になってる」

男1 「うわー、二人とも薄情だな。実際持っても大して連絡なんか取らないけどね？」

男3 「今となっては後悔してますよ。てか、そう。今日わざわざ地元寄ったのは

さ、誰かわかる人いないかなって思ったのもあったわけ」

男1 「同級生の連絡先ってこと？」

男3 「そうそう、岸川とか、ツルちゃんとか。まさか本人いるとは思わなかったけどさあー！」

男1 「みんなだいたい地元離れちゃったし、俺ぐらいじゃない？いるの」

男2 「いい勘してるよ、この人毎日いるし」

男1 「いや毎日はいないから、いない時もあるから」

男3 「そっかー、ラッキーだったな。ほか同級生で連絡つく人いないの？」

男1 「連絡先はあるけど繋がるかはわかんないよ」

男3 「それでいいから」

男1 「・・・いいけどなんで」

男3 「お金を借してほしくて」

男1 「だと思ったよ！」

男3 「たーのーむーよー」

男1 「やだよそんな麻薬の売人みたいな真似」

男3 「ツルちゃんから聞いたって言わないから」

男1 「そう言う問題じゃなくて」

男3 「いいじゃんー、ここでツルちゃんから聞かなくても実家の連絡網漁るだけなんだからさー」

男1 「いよいよやり口がエグいよ」

男3 「・・・ふう。うん、冗談だよ」

男1 「いや無理があるって」

男2 「急になんか、悟り開いたみたいになってるけど」

男3 「いやー、なんかさ、高校の頃とか色々思い出しちゃってさ」

男1 「何どしたの」

男3 「あんな時間を忘れて馬鹿騒ぎしてた旧友に、なんておこがましいお願いをしてたんだろうって急に恥ずかしくなってさ」

男1 「おこがましくは無いけど、無い袖はふれないから」

男3 「自分でスった借金だし」

男1 「自覚はあるんだ」

男3 「ちゃんとね、夢叶える同級生にこんなこと頼めないなって・・・」

男2 「・・・ってしがえないバーテンを見つめられてもね」

男3 「ここって資産価値いくらぐらいなんですか」
男2 「相模湾にチンするぞ」
男3 「すみません」
男1 「わかったよ・・・少しくらいなら」
男3 「いま、なんと」
男1 「たぶん全っ然足しにならないとおもうよ」
男3 「ありがとうございますうあ」
男1 「いやほんとちょっとだからね？」
男2 「お人よしだねー、平気？」
男1 「まあ、こんなんだけど約束は守るやつだったんですよ、なんだかんだ」
男3 「倍にして返す」
男1 「フラグたてないで」
男3 「いや、ほんとにほんとに」
男1 「それがフラグだから」
男3 「とりあえず連絡先教えてよ」
男1 「うん、いいよ。マスター紙ある？」
男2 「ありますとも」

紙に書いた連絡先を渡す

男3 「さんきゅ、したら俺は今日は帰るよ」
男1 「ええ、金の話で終わり？」
男3 「いや積もる話あるけどさあ、大金借りてるやつと飲んでも酒まずくしちゃうから」
男1 「逆になぜその配慮はできるんだ。いや別に気にしないから」
男3 「明日早いのもあるからさ」
男2 「え、夜逃げ？」
男3 「いやしないしない」
男2 「どうかな」
男1 「まあ、その時は俺の友達を見る目がなかったってことで」
男3 「うわその言い方傷つくなー・・・わかった。じゃあ、来年！」
男1 「来年？」

男3 「1年後またこの店に来るから。その時返す」

男1 「1年か」

男2 「そんな短い期間で大丈夫？」

男3 「大丈夫、というかむしろそれまでになんとかしないとこっちもまずいで」

男1 「わかった、1年後ね」

男3 「おっけいけい」

バーテンが酒を作り、出す

すると一瞬照明が変わる。

1年後

2

男3が入ってくる

男2 「本当にきた」

男1 「ね」

男3 「きましたよ約束通り夜逃げしなかったでしょ！」

男1 「意外」

男3 「きっちり1年。てことで返すよ。ありがとうございました」

男3 封筒を渡す

男1 「微力ながら」

男3 「倍にはできなかつたけど、多少色はつけたから」

男1 「別に良かったのに」

男3 「そうはいきません、とりあえずマスター、今日のおすすめ教えて」

男2 「んー、この間お土産にソバ焼酎もらったけど」

男3 「ジントニックを」

男2 「ジントニックね」

男1 「すっかり社長かあ、すごいね」

男3 「こっからよこっから、立ち上げるだけなら誰でもできますからツルちゃん

は順調？」

男1 「うん、まあ、たまに呼ばれてギター弾いたりとか、最近はライブの演奏みたいなやつは減ってきたけどね。すっかりこれが板につきちゃった」

男3 「へえー、そっか。あんまりこだわらないならうちで働く？ 絶賛人手募集中」

男2 「そもそも聞いてなかったけど何の仕事なの」

男3 「そうだったそうだった、あのね、ポッピングボバ屋」

男2 「・・・なんて？」

男3 「いやだから、ポッピングボバ屋」

男2 「・・・なんて」

男3 「いやだから、ポッピングボバ屋」

男2 「・・・なんて」

男3 「だから、ポッピングボバ！ こう、ゼラチンの幕みたいなボールの中にジュースが入ってるの。んでそれをソーダ水の中に入れて飲むと中で弾けて炭酸ジュースに・・・ああ、お寿司のイクラみたいな」

男1 「イクラを炭酸水の中に？」

男3 「いやイクラじゃなくて、みたいになって」

男2 「流行ってるのそれ」

男3 「今阿佐ヶ谷に1号店。連日行列だよ？」

男2 「なんかすぐ廃れそうだなあ」

男3 「ふっふっふところが新店舗も来月出すんですよ」

男1 「イクラ炭酸水が？」

男3 「百聞は一見にんとやら・・・はいこれサンプル」

男2 「・・・うん・・・うん、へえ」

男1 「こんなのあるんだ」

男2 「確かに、ちょっと面白いかもね」

男3 「お酒に入れても合うかも。マスターこれでなんかカクテル作ってよ！」

男2 「なるほど、ちょっとまって」

男1 「一応会社は順調なんだ」

男3 「おかげさまでね。そっちはどうなの」

男1 「たまにライブ応援行ったりとか、あとはたまに演奏したり」

男3 「かっこいいねーミュージシャンって感じで」

男1 「社長に言われると複雑だなー」

男2 「これ、ウオッカソーダと合わせたら美味しんじゃない？」
男3 「ああ、ありかもそれ」
男2 「ちよっと作ってみるわ。飲む？」
男1 「じゃあもらおうかな」
男2 「はいよ」
男3 「バイトもまだしてんの？」
男1 「え、ああうん」
男3 「もったいないよな、まじめにうちで働く？」
男2 「お、引き抜き？」
男1 「考えとくよ」
男3 「いや結構本気でいってるからね」
男1 「嬉しいけど、そんな起業できるモチベーションないから」
男3 「まあそれもそうだよな、それよりはメジャーデビュー待ってるわ」
男1 「いやもう間に合わないよ」
男3 「何言ってるんの人生これからよ？」
男1 「いやこれからってことはないでしょ、ピークは過ぎた感じあるよ」
男3 「そんなことないって」
男1 「どうかな」
男3 「ツルちゃん的にピークっていつよ？」
男1 「ええ・・・」
男2 「幼稚園」
男3 「早くない？」
男2 「物心ついた時には余生っていうね」
男1 「でも、高校の時間が一番楽しかったかも」
男3 「そこ？」
男1 「無理やり屋上行ったりしたじゃん」
男3 「ああ、忍び込んだなそういえば」
男1 「あれ怒られたな」
男3 「だって、ギター持って忍び込むから」
男1 「屋上で弾きたかったの」
男3 「そうだ、お前が弾いてたら、下の教室で岸川が歌い出してさ」
男1 「あったね」

男3 「いやお前らのコンビ好きだったんだけどな。ドリカムみたいで」
男1 「ドリカムって」
男3 「ていうか、ぶっちゃけ付き合ってたの？お前ら。いつも一緒にいたけど」
男1 「それももう何万回聞いたけど違います」
男3 「ちえー」
男1 「まあ、卒業してから会おうって約束はしたんだけどね」
男3 「お？」
男1 「一緒に音楽やろうって、約束してた」
男3 「え、そうだったの」
男1 「放課後、二人で練習したりしてたんだよ。曲作ったり」
男3 「えー、なんだよいつのまに」
男1 「こっそりやってたからさ」
男3 「それで？」
男1 「・・・会えなかったんだよね」
男3 「え」
男1 「卒業式の次の年、ほら、桜の木あったじゃん？あそこで会おうって約束してたんだけど・・・会えなかった」
男3 「・・・」
男1 「そこからは、連絡もうまくとれなくて」
男3 「そうだったのか」
男1 「だからまあ、なんとなく引きずっててさ」
男2 「・・・取り込み中すみません」
男1 「ああいや全然取り込んでないけど」
男2 「例のやつできてるけど出して平気？」
男1 「例のやつ？」
男2 「あの、ピッポンパポパポみたいな」
男3 「ポッピングボバね」

電話が鳴る

男3 「あ、ごめん電話・・・hey・・・oh thank you!! あ、その件なんですけどね」

男3、店から出る
(ハケ方雑すぎかな)

男2 「なんだよ忙しいな」

男1 「ね」

男2 「あ、とりえず飲んでみてよ」

男1 「うん」

バーテンがカクテルを出す

照明が変わる

#3

カクテルを飲む男1

男1 「うん、美味しい・・美味しいけどそんな人気？」

男2 「いやもう連日大人気よ。原宿に似たようなお店幾つも作られててさ」

男1 「マスターのこれも？」

男2 「うん、おかげさまでまあまあ人気」

男1 「最初に出したのこの店じゃん」

男2 「そうそう、もう特許取っていいよね」

男1 「流行の最先端に乗ってしまった」

男2 「たった1年ちよつとで流行るもんだよねー、ポップインピーポー」

男1 「ポップイングボバ、ね」

男2 「いえてなかった」

男1 「しっかりしてよ」

男2 「そういや、この間の話はどうなったの」

男1 「ああ、正社員の話？」

男2 「うん。どうすんの？」

男1 「まあー、結局派遣でやってるくらいならなっちゃった方がいいのかなって」

男2 「うんうん」

男1 「こっちの仕事も最近来なくなっちゃったからな」

男2 「引退したわけじゃないでしょ」
男1 「まあ、そうだけど」
男2 「今の時代どうとでもやりようはあるでしょ？」
男1 「まあ、うん、そうだね」
男1 「とか、やってる間にやつのは会社はどんどん大きくなるし」
男2 「この間テレビでてたよね」
男1 「いや、すごいよなほんと」
男2 「わかんないもんだね世の中」

男3 入ってくる

男2 「お、いらっしやい」
男3 「うっす」
男2 「いまちようど話してたの」
男3 「ええ、何悪口悪口？」
男2 「うん、成金野郎って」
男3 「ガチのやつじゃん！、まあ、成金だろうが成ってるわけだからいっそ褒め言葉だけどネ！」
男1 「キャラ変わってない」
男3 「いやー、今楽しいのよ、ようやく諸々軌道にのってさあー。あ、ブランド、ロックで」
男2 「はーい」
男3 「お、飲んでくれてんの？」
男2 「そーいやどんな味だったかなって」
男3 「うれっしーねセンキュ！」
男1 「順調そうじゃん」
男3 「順調も順調よ鰻も上り過ぎて飛ぶ鳥落としかねない」
男2 「調子のってんなー」
男3 「乗らせてよー、ここまでやったんだからー」
男1 「まさに、人生のピークってやつ？」
男3 「いや、俺のピークはまだまだこんなもんじゃないよ」
男1 「そうなの」

男3 「おう、まだまだやりたいこといっぱいあるからね」
男1 「すごいなあ」
男2 「社長になつても足繁く通ってくれてありがとね。たまにお客さんに話すと驚かれるよ」
男3 「そりゃまあお世話になりましたから！これからもくるよ」
男2 「もうじゃんじゃん飲んでって。値段こっさり倍にしとくから」
男3 「えー。気がつかないかも」
男2 「腹たつな〜」
男3 「ごめんさーい」
男1 「もう借金してたの嘘見たい」
男3 「その節はお世話になりました」
男1 「ううん、なんかこっちも勇気もらえるからさ」
男3 「ええ、そう？」
男1 「いや、同級生のサクセスストーリー目の前でみてるとさ、こう、ね。自分ももつとやれるのかなって思うよ」
男3 「ありがとう〜それを言うならツルちゃんだってそうじゃん」
男1 「いや俺は結局大したことしてないし」
男3 「・・・派遣の仕事は続けてるの」
男1 「うん、まあぼちぼち」
男3 「少し、真面目な話するね」
男1 「え、何」
男2 「あ、席外します？」
男3 「いやそこまでじゃないから」
男2 「ああなんだ」
男3 「いやなんの話だと思ったの」
男1 「いきなりかしこまられるとこっちも身構えちゃうからさ」
男3 「ごめんごめん、いやさー。ツルちゃん、まだ営業やってるんだったらさ」
男1 「うん」
男3 「うちこない？」
男1 「え」
男3 「いや、わりとまじで」
男1 「ええ・・・」

- 男2 「スカウトじゃん」
- 男3 「そうなの、スカウトしにきました」
- 男1 「気持ちはあるがたいけど、俺にそんな実力ないよ」
- 男3 「地方とか、ゆくゆくは海外への出店も視野に入れてるからさ、今強化してんのよその辺」
- 男1 「うん」
- 男3 「音楽の方もまだやってんでしょ」
- 男1 「一応はね」
- 男3 「その辺も融通利かすから、副業オツケーだし」
- 男1 「・・・」
- 男3 「社長直下の部署だから、給料も言い値でいいし、優遇するからさ。月の半分くらいは、まああちこちいってもらうけど」
- 男1 「いや、悪いよそんな、別に営業歴、長いわけではないし」
- 男3 「んなこと言ったら俺だって社長経験浅いよ。こう言うのって経験よりパッションだからさ。旧友の心もちはそのらへんのエリートよりよっぽど信用してるよ。ほらミュージシャンだし」
- 男1 「言うほどじゃないよ」
- 男2 「え、それってバーテンと兼業でもいけますか？」
- 男3 「あれ、マスターもやる？」
- 男2 「給料くれるなら」
- 男3 「ある程度は融通きますよ、なんてったって稼いでますから」
- 男2 「じゃあー、そうだなー、現実的なラインでー、月収2千万とか」
- 男3 「流石に無理かな」
- 男2 「無理かー」
- 男3 「いやそのくらい払えるようになりたいよね」
- 男1 「かってくれるのは嬉しいけど・・・まあ俺結構今好き勝手やってるからさ」
- 男3 「特に制限かける気はないよ」
- 男1 「でもやっぱ、今よりは忙しくなるじゃん、確実に。忙しいのがいやってわけじゃないんだけど、あんまり俺使命感とじゃないし、他にもっと適任いるんじゃないかな」
- 男2 「なんか、優等生の断り文句みたい」
- 男3 「ハートブレイク」

男1 「いやごめんて、気持ち嬉しいのよほんとに」
男2 「いやそれだよそれ」
男1 「これ！？これがダメなの」
男2 「中途半端な優しさは人を余計に傷つけるんだぞ」
男3 「そうだぞ」
男1 「いや知らないから」
男3 「はー、実際のところさ。うん、まだ待ってるの」
男1 「うん？」
男3 「桜の樹の下で？約束をした女の子と」
男1 「そうだね」
男3 「あんま言いたくないけどさあ」
男1 「いや、もう向こうは忘れてると思うよ」
男3 「・・・そう思うよ」
男1 「今何してるのかも知らないし」
男3 「大学ん時は歌手目指してたみたいだけどね、卒業してからは俺も知らない」
男1 「え、なんで知ってるの」
男3 「不思議なことに有名になると友達と親戚が増えるみたいでさー、連絡先知らないはずの人たちが次々連絡くれて」
男2 「この間テレビでたせい？」
男3 「そうそう」
男1 「・・・」
男3 「本人じゃないよ？でもなんか同じ大学のやつがいて、ほら、3組の細い方の鈴木」
男1 「いた、かも」
男3 「そいつに聞いたら最初は歌手目指して大学行きながらスクール行ってたみたい。でもそっから先は知らないって」
男1 「そうなんだ」
男3 「いいじゃないの、再開はしなかったけどお互い夢に向かってまっすぐ進んでたってことでさ」
男1 「・・・」
男2 「むしろ、同じ業界ならどこかでばったり会うんじゃない？」

男3 「そうそう」
男1 「いやー、いうても広いよ？」
男3 「まあとにかく、あんまりとらわれすぎるのももったいないよって話」
男1 「うん」
男3 「かつこいいけどね、そういう昔の約束ずつと守ってるの、酔狂な感じで」
男1 「いや別にカッコつけでやってるわけじゃないし」
男3 「わかってるって」
男1 「少し、考えさせてよ」
男3 「少してどのくらい」
男1 「えー、1ヶ月」
男3 「三日でシクヨロ」
男1 「三日!？」
男3 「こう言うのはスピード勝負なんですよ」
男2 「どうすんの」
男1 「いや、うん・・・やっぱごめん」
男3 「そう」
男1 「一応さ、ほら、音楽やってたいし。一応、自力で・・・もしあいつがきた時に、また一緒にやりたいからさ」
男3 「・・・残念です」
男2 「残念です」
男3 「マスターやる？」
男2 「ぶっちゃけいくらまで出せるの」
男3 「マスターだったらそうだな・・・こんくらい？」
男2 「少なくない？」
男3 「冗談冗談」
男1 「いや、まじで気持ちは嬉しかった」
男3 「だからそう言うのだった！」
男1 「ええー」
男2 「よくないよそう言うの」
男1 「めちゃくちゃ理不尽だわ」
男3 「・・・ごめん、今日は帰るわ」
男2 「え、もう帰るの？」

男3 「うん、海外の人とミーティング、時差あるから」
男1 「酒飲んだよね」
男3 「大丈夫、先方昼なのに飲んでるから」
男1 「大丈夫なのかそれ」
男3 「また今度来るよ。そんときゆっくり話そ。マスターも」
男2 「待ってますよ」
男3 「うん。あ、お会計・・・」
男2 「ああ、800万円になります」
男3 「高いなー・・・カードで」
男2 「・・・」
男3 「いやまじな目で見るのやめて」
男2 「出せ・・・？」
男3 「いや流石に出せません」
男2 「使えないな」
男1 「ほんとに請求しそうで怖いよ」
男2 「いけるかなって」
男3 「いけません。さて、じゃあまた」

男3 帰る

男1 「・・・ふう」
男2 「よかったの？断って」
男1 「うん、それになんか友達の会社って少し複雑じゃない？」
男2 「たしかに仕事になっちゃやうとねー」
男1 「勢いあるうちに俺みたいなのとってもしようがないしさ」
男2 「どうするの？正社員の話は」
男1 「たつつんのオフア蹴って、そっちってのもね」
男2 「そっか」
男1 「もう少し音楽の仕事増やせるようにする」
男2 「まだメジャー諦めてないんだ」
男1 「いやー、それはなんとなく諦めてる気がするな」
男2 「そうなの」

男1「諦めたくなかったけど、なんか、なんとなくもう無理になって思うようになっちゃった」

男2「それはボーカルの子が来ても？」

男1「来たなら、もっかい目指す」

男2「おお」

男1「もし会えたら、真剣に、メジャーデビュー狙ってみる」

男2「おお」

男1「会えたらだけどね」

男2「いいじゃんか、また夢追いかけてちゃう系でしょ」

男1「からかわないでって」

男2「夢か、なんか自分も子供の頃はワールドカップ出たいとか言ってたな」

男1「え、そうなの」

男2「うん、サッカー少年でした」

男1「初耳！やめちゃったの？」

男2「中学の時に骨折して、そこからやめちゃった」

男1「それで映画？」

男2「あ、そうそう。入院中にずっと映画みてたから、そこかも」

男1「でも今はバーテンなわけだ」

男2「だいぶ変わったね」

男1「でもそういうさ、ちょっとした、ふとしたことでもさ、意外と人生に影響してるなーって感じるってことってない？」

男2「急にポエミー」

男1「いやいや、なんか、さ、やっぱり積み重ねだなんて思うわけよ。あの時あれがあったから今こうなってるんだなって。それはさ、いい意味でも悪い意味でも」

男2「ずっと待ってたからこそ？」

男1「うんー、観れた景色もあったのかな、とは」

男2「今日すごいポエミーじゃん」

男1「やめてって、それに観れた景色はあったけど、観たかった景色かどうかはまた別だよね・・・」

男2「なに、後悔してるの？」

男1「そういうわけじゃないけどさ、なんかたっつん見えて、俺の人生のピーク

は一瞬だったなあ」

男2 「んー、ピークかあ」

男1 「気がついたら終わって」

男2 「それこそ桜みたいだね」

男1 「桜？」

男2 「花見したいなーとか思っていると気がつくともう散っちゃってるの、なんか毎年毎年花見のタイミング逃しちゃって」

男1 「意外と短いよね、言われてみれば」

男2 「結局花見なんてしばらくしてないなあ」

男1 「わかるな、そういうの」

男2 「まだ飲む？」

男1 「お願い」

バーテンが酒を作り、出す
すると一瞬照明が変わる。

1年後

#4

男3 入ってくる

男3 「・・・」

男2 「久しぶり。元気・・・なわけないよね」

男3 「・・・」

男2 「何飲まれますか」

男3 「ウォッカ」

男1 「大丈夫？」

男3 「なんとかなる・・・」

男2 「一応聞くけど何があったの」

男3 「・・・」

男1 「・・・食中毒が連発して営業停止に」

男3 「皆まで言うじゃないよ」

男1 「・・・ごめん」

男3 「積み上げてきたものが、崩れるのは一瞬だよな」

男1 「いいじゃない、無職からずっとやってきたわけだから。またやり直せばいいでしょ」

男2 「おこっちゃったものはしょうがないんだから」

男3 「そうだよなーまだ倒産するわけじゃないし」

男1 「そうそう」

男3 「でも国内のイメージ回復は相当時間かかるわけよ・・・」

男1 「元気だしなつて、そもそもあそこまで会社デカくできるだけすごいんだから」

男3 「・・・そうだな、誰でもできることじゃないよな」

男2 「そうそう」

男3 「でも流石に凹むわー」

男1 「らしくないじゃん、借金あってもヘラヘラしてたのに」

男3 「店が半分潰れてさ、社員もリストラせざるをえなくて、するまでもなく辞めてくんだけどね。これでどうやって元気を出せと」

男2 「こう言う時のためにね、あるんだよ」

男3 「なにが」

男2 「おーさーけ」

男3 一気に飲む

男1 「ほどほどにね」

男3 「飲ませてくださいよ」

男2 「ほんと退屈しない人生だね」

男3 「嫌味っすか」

男2 「そう聞こえたなら謝るよ」

男3 「いや・・・」

男1 「いいじゃんか、またやり直せば」

男3 「簡単に言ってくれるじゃん」

男1 「ごめん、でも実際すごかったじゃん」

男3 「何が」

男1 「諦めないって言うか、会社立ち上げて、うまくいかない時も、うまくいっ

てからも、次へ次へって進んでてさ」
男3「・・・」
男1「俺とは大違いでさ、実際ほんとに」
男3「・・・」
男1「すごいなかつこいいなって思ってたよ」
男3「・・・」
男1「だからさ、」
男3「なんでちょっと嬉しそうな」
男1「・・・」
男3「・・・」
男1「別に、そんなことないけど」
男3「そうかい」
男1「うん」
男2「気が立ってるんでしょ」
男3「うん、そうです、ごめん」
男1「いや・・・」
男3「・・・」
男2「お腹空いてない？なんかフードだそうか」
男3「去年ぐらいにさ、誘ったじゃん」
男1「うん」
男3「一緒にこないかって」
男1「うん」
男3「あれ、ついていなくてよかったなとか思っていないかって」
男2「・・・へしこ茶漬けとかあるけど」
男1「思っていないよ」
男3「思っていないのかよ」
男1「思っていないよ」
男3「普通思わない？ついてたら今頃悲惨だったよ。逆になんで思わないよ」
男1「いや・・・そりゃ、少しは思ったけど」
男3「思ったんじゃない」
男1「八つ当たりならやめてよ」

男3「思うでしょ、断ってよかったって。実際入る気さらさらなかったわけだし」
男1「いや違うって」
男3「だってお前実際本気で待ってるわけないでしょ」
男1「何が」
男3「岸川のこと」
男1「は」
男3「彼女でもなかったやつをさあ、この歳になってまで」
男1「何・・・」
男3「程のいい断り文句にされて少し複雑だったわけ。便利だよなっかしいし」
男1「いや、断り文句として使ったわけじゃ」
男3「あれから岸川きましたか」
男1「きてないよ」
男3「きてないよな来るわけないよな」
男1「八つ当たりならやめてよ」
男3「本気で待つか？10年以上もこなかったのに」
男1「いや、なんか、半分意地っていうか」
男3「意地でも俺とは仕事したくないと」
男1「そういうことじゃなくて」
男3「いいんだよ結果判断正しかったわけだから」
男1「・・・気が立ってるんだね」
男2「そうみたいよ」
男3「フード何があるっけ」
男2「お茶漬とかポテトとか」
男3「・・・とにかくさ、うん、別にこないなら、こないでいいんだけど。そうやって半分見下したような位置で慰めの言葉とかかけないでほしいわけ」
男1「気に障ったなら謝るよ」
男3「だってほんとにすごいなかつこいいなって思ってたなら自分こんなところですぶってないでしょ」
男1「いや、だから、そういう自分と比べた上で」
男3「実際何、あれから音楽の方なんか仕事増えた」
男1「そんなに増えてはないけどさ」

男3「なんか自分が勇気でないだけのことを岸川言い訳にされたのが、すこし、癪に障ったわけ」

男1「・・・酔ってるよ」

男3「まだ一杯目」

男1「酔ってるじゃん」

男2「落ち着きなって」

男3「そうやって色々待ってる待ってるって言って逃げてきたんだろうなと」

男1「やっぱ酔ってるよね」

男3「そんなのに、ひとが失敗した瞬間かっこいいと思ってたじゃないだろ」

男2「えーっと！喧嘩は、他所でやって・・・くれる？」

男3「・・・」

男1「落ち着こう。ほら、マスターにも、さ、迷惑だし」

男3「・・・ふう、うん。・・・うん酔ってるし気が立ってるし八つ当たりです

よ」

男1「・・・」

男3「ごめん」

席を立つ男3

男3「マスターもごめん」

男1「うまく、言えないし、いうとおりの部分も、あるけど」

ドアを開けようとする男3

男3「何が」

男1「かけた言葉、全部嘘ってわけじゃない、から」

男3「・・・」

男3店を出る

男1「・・・」

男2「気が立ってたから、しょうがないよ」

男1「うん・・・」
男2「実際、今あんな状況じゃ八つ当たりしたくもなるでしょ」
男1「うん」
男2「無茶苦茶なの言ってるのは、向こうもわかっているはずだからさ、しばらくしたら落ち着くんじゃない」
男1「むちゃくちゃでもないよ」
男2「ちよつと、あんまり真に受けないの」
男1「そうじゃなくてさ」
男2「はいはい、お腹空いてるから辛気臭くなんの。なんか食べる？」
男1「違うんだよ。いかなかったの。俺なんだよ」
男2「・・・どういうこと」
男1「約束した日、桜の樹の下で。多分岸川は待ってた」
男2「・・・」
男1「約束したのは、ほんと。卒業した1年後の春、またあそこに集合しようって。それで一緒に音楽やろうって」
男2「なんで行かなかったの」
男1「なんか、怖くて。岸川は、どう見ても才能があった、多分やっていける、でも俺は・・・自信がなかった」
男2「二人でやってく自信が？」
男1「うん、でもそんなうちに時間は去ってって夜になって、ようやく、決心がついた。うん、行くだけ行こう、行って・・・行ってから決めようって」
男2「・・・」
男1「チャリで真っ暗な道をひたすら進んだ、桜の樹の下にいたら、彼女はもういなかった」
男1「いなくて、少し、ホツとした。ホツとしたけど、やっぱり申し訳なくて、後悔して。そのうち朝になったけどやっぱりこなくて」
男1「次の日も、次の日も来てみたけどやっぱりもうこなくて、そりゃそうだよ約束破ったの俺なんだから・・・そこからずっとそれきり」
男2「連絡は」
男1「返ってこなかった」
男2「・・・」
男1「タツツンのいうとおりだよ、言い訳にして逃げてただけ」

男1「あそこから一步も進めなかっただけ、あの時約束守れなかった自分をぐるぐるぐる後悔して、来たら謝ろうとか、次再開できたら今度こそ本気で目指そうって、一緒にふんばろうって思った」

男2「うん」

男1「でも、どこかでもうこないことがわかってたから、わかってたからそんなこと思えたんだろうな」

男2「待ってなんかないってこと」

男1「待っていただけなんだよ」

男2「・・・」

男1「来年は来るかもしれない、再来年は来るかもしれない、なんて、いつの間にか責任転嫁して、ずっとすがつた」

男2「・・・」

男1「そのうち、桜の木がなくなって、色々変わって、この店もできて、でも俺はずっと変わってない」

男2「そうかな」

男1「ウオツカを」

男2「この流れはオススメしないよ」

男1「こういう時のためにはないの？」

男2「・・・あるよ」

酒を出すバーテン

飲み干す男1

男1「もう一杯」

男2「・・・程々にね」

男1「いいから、とにかくね、飲みたい気分なの」

男2「飲み過ぎだよ」

男1「いいから」

照明変化とともに酒を飲みまくる男1

月日がすぎてゆく

暗転

机に突っ伏している男1が一人

周りには空のグラスが複数

男2が奥から入ってくる。

男1「・・・」

男2「起きてる？」

男1「・・・ごめん」

男2「いいけど」

男1「たっつんに金貸す夢見た」

男2「ああ、昔あったねそんなこと」

男1「そうだったっけ」

男2「だいぶ前だからね」

男1「そっか・・・もうそんなか」

男1「この店は変わらないね」

男2「そう？変わってるよメニューとか」

男1「そうだけどき、桜の木がなくなって、ずっとここにいるじゃん。おれはさ」

男2「いるね」

男1「よく考えたら、本来の桜なくなってんのにずっと待ってられたのって、この店のおかげだよなーって思って」

酒を飲む男1

男2「ああ、そういえば、話したっけ」

男1「何を」

男2「この店をなんで初めたか」

男1「聞いたことないかも」

男2「昔、映画撮ってたんだけど。これが入選しなかったら映画やめようって決めて撮った作品が1次で落ちて。悔しくて泣きながら死ぬほど飲んで。意識なくして路上で行き倒れてたわけ」

男1「若いね」

男2 「そしたら雨が降ってきて」

男1 「え、うん」

男2 「どんどん冷たくなるんだけど意識朦朧としておきれなくて。死ぬなって、思ってる。そしたら女の人が傘と、あったかい飲み物くれたの」

男1 「うん」

男2 「めっちゃめっちゃ感謝して、その時に色々話も聞いてもらっちゃって。今自分ゼロの状態だからお礼に何かさせてくれって聞いたの。そしたらこの街で店をやってほしいって言われたんだよね」

男1 「なんでこの街で」

男2 「昔、この街にあったんだって。誰かを待てる場所が。でもそこはもうなくなっちゃったから、そこから近いこの場所に、みんなが誰かを待てるような場所を作って欲しいって」

男1 「・・・」

男2 「顔も覚えてないし、なまえも知らないけど。もしもう一度会えたらお礼を言いたくて始めたのもある」

男1 「・・・」

男2 「今思えばその場所って多分、この辺にあった桜の樹のことでしょ？」

男1 「・・・たぶん、そう」

男2 「その人も誰かを待ってたんだろうなって」

男1 「それっていつの話」

男2 「ほんとに、このまち来たばっかの頃だから、それこそ多分木がなくなったあたりだよ」

男1 「・・・それってさ」

男3 入ってくる

男2 「いらっしやい」

男1 「生きてたんだ」

男3 「こっちのセリフだよ」

男3 席に座る

男2 「何飲まれます」

男3 「ジントニックを」

男1 「・・・」

男3 グラスを持つとおもむろに男1の方へ

乾杯する二人

男3 「あの時はごめんな」

男1 「え」

男3 「何年前、八つ当たりしちゃって」

男1 「いいよ、気にしてない」

男3 「・・・」

男1 「実際、ちょっと嫉妬してた部分もあったし」

男3 「そうなの」

男1 「なんか眩しくてさ、くすぶってた自分と比べちゃって、惨めに思えてさ」

男3 「うん」

男1 「そうだと思ったから、少し怒ったんでしょ」

男3 「まあ、ね」

男1 「当たってるよ」

男3 「悪いけど、そんな素直じゃないだろうなと思ってた」

男1 「ひっど」

男3 「腐れ縁ですから」

男1 「確かに」

男3 「うん、でもあれは悪かったよ」

男1 「会社は潰れてないんでしょ」

男3 「なんとかか、といっても売っちゃったからもう俺の会社じゃないけど」

男1 「そっか」

男3 「今は次のビジネスに向けて準備中」

男1 「相変わらずすごいね・・・これは本心」

男3 「そっか」

男1 「ていうか、別にまえからすごいと思ってたのも、本当だよ」

男3 「ほんとにかあゝ」

男1 「まあ、嫉妬とかね、確かにあったのも事実。でも、そういう感情がちゃんとあったのも、事実」

男3 「そっか」

男1 「うん」

男2 「ずっとこなかったのに、今日はどうしたの」

男3 「あー、こなかったというか、まあずっと気まずくて行きたくなかったんだけど」

男2 「正直だな」

男3 「まあ、ちょっとお伝えしたいことが」

男1 「え」

男3 「この間、岸川がなにしてるか聞いてさ」

男1 「え」

男3 「たまたま、知り合いが知ってて。聞いたんだ近況」

男1 「・・・」

男3 「ああは言っちゃったけど、実際気にしてただろうし、その、申し訳なきもあったから。ツルちゃんには伝えておこうと思って」

男1 「・・・」

男3 「わかっていると思うけど、その、歌手的なので大成してたらもう耳に入ってるよね」

男1 「うん、それはなんとなくわかってた・・・あいつでもだめなのかー」

男2 「厳しいね芸能の世界は」

男1 「あー、そっか。うん」

男3 「それで」

男1 「いや、大丈夫」

男3 「いいの？」

男1 「うん、なんか、それ聞いちゃうのは反則な気がする」

男3 「何ルールだよ」

男1 「自分ルール」

男3 「へんなどこぼっか硬いよな」

男1 「いいでしょ、だから大丈夫」

男3 「そしたらさ、なんか伝言はある？」

男1 「伝言？」

男3 「うん」
男1 「じゃあ、お店においでって言うておいて」
男3 「・・・わかった」
男2 「さてと、仲直りは終了かな」
男1 「いや謎にすぎらないだよ」
男2 「だって彼ずっと気にしてたから」
男3 「ごめんて」
男1 「いや俺も悪かったから」
男3 「ところでさあ」
男1 「え、急」
男3 「今度こそ一緒になんかやろうよ」
男1 「いいけど、何を」
男3 「それはこれから考える」
男1 「無計画かよ」
男3 「これから考えるんだって、このまま会社傾けて終われないから、返り咲かないと」
男1 「タツツンの人生はいつもピークだね」
男2 「あ、」
男3 「なに」
男2 「人生のピークって話でさ、思ったんだけど」
男1 「何」
男2 「桜の満開って一瞬だけだよ」
男1 「うん？」
男2 「満開を過ぎても、木はずっとそこにあるわけだから、また来年。咲けるじゃない？そんな感じじゃないかなって」
男1 「・・・ポエミー」
男2 「え、結構真剣に言ったんだけど」
男3 「だからこそそのポエミー」
男2 「バカにしてるでしょ」
男1 「ていうか最初にこれ言ったのマスターだからね」
男2 「マジで？覚えてない」
男1 「言ってたよ結構前だけど」

会話を交わす3人

溶暗

【スタッフ】

原案・制作…藤井のりひこ (GEKIGAproject/クス会)

宣伝美術…呉桜

チラシ撮影…今江咲子

音響操作・照明操作…竹内浩太郎

受付…木所真帆

※本作品の著作権は全て演劇ユニットクス会が所有します

テキストおよび一部内容の無断転載・無断利用は禁止いたします。

上演利用については演劇ユニットクス会までお問い合わせください
演劇ユニットクス会お問い合わせ

Email:kuzu_kai@yahoo.co.jp

終